
遊戯王 狂わされし運命

Rデッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 狂わされし運命

【著者名】

リチャード

【あらすじ】

目を覚ますと俺は真っ白な空間にいた。
死神の話によると、俺は死んだらしい。
ただ俺の死はこいつらの予定に無かつたらしく、
俺は別の世界に転生することになった・・・
この小説は突如死んでしまった主人公が、
遊戯王の世界に転生する物語です。
デュエルは低レベルでしょうがどうかよろしくおねがいします。

トヨラ 200 プロローグ（前書き）

さて、2作目の小説となりました。Rテクニクスです。ネギまと平行してやつてこいつもりなのでよろしくおねがいします。

TURNO プロローグ

「 じーじーは・・・・・ どーだ?・・・・・

目覚めた俺は何故か、何も無い真っ白な空間にいた。

「 確か俺は・・・・・

俺は確かに黙だ、思い出せない。いつたい俺はどうしてじーじーにいるんだ?・・・・・

それはあなたが死んだからです

俺の疑問に答えるように黒いローブを着た眼鏡の女が現れた。

「 死んだ?俺がか?・・・・いや、その前に教える。お前は誰だ?そしてじーじーはどこなんだ?」

じーじーは天国と地獄の境目。そして私は死神です。

「 天国と地獄の境目?死神だと?ビートの漫画のゲストキャラみたいな格好しやがって・・・・・

ふざけてんのかこの女・・・・いや、コイツの顔を見る限り本当らしいな、目を見ればわかる。

何より俺がこんな空間にいる時点で、じーじーの言つことは本物なのだろう。

「 まあいい。で、なんで俺はこんなところにいるんだ?死んだなら

天国か地獄のどちらかに逝くはずだろう？

最も俺は地獄行きだろうがな。」

そうだ、俺は生きてる時はお世辞にも善人だったかと問われると、そうではない。寧ろ悪人寄りだと思う。

「え、そうでもないんです。確かにあなたは善人かと問われれば悪人だと答える人もいるでしょう。しかし、同じようにあなたは悪人かと問われれば善人だと答える人もいます。

「続けてくれ。」

つまりあなたは善人でもあれば悪人でもあり、悪人でもあれば善人でもあります。なので一概にあなたを地獄に送ることは出来ないんです。同じように天国に送ることもね。

「なるほど、よく分かった。となると、俺はどうなるんだ？」

それに、あなたの死は予定になかったんですね。

「何だと？」

あなたの寿命はあと数十年は残っていた、それにも関わらずあなたは死んでしまったんです。

こういうことは無かつたわけでもないのですが前例は限りなく少ないんです。

「で？」

しかしその少ない前例の中でも、あなたのように善人でもあり悪人でもある人は今までいなかった。

善人か悪人かのどちらかだつたんです。どちらとも言えない者を天国または地獄に送ることは出来ません。

評議の結果、あなたへの処遇はこうなりました。

評議ねえ、死神つてのは職業みたいなモンなのか?サラリーマンみたいに会議してんのが目に浮かぶぜ。

「で、俺はどうなるんだ?」

あなたには転生をしてもらひことになりました。

は?転生?

「意味、生まれ変わる」と。」

「ちょっと待て。生き返ることになりました、つてなら分かるが何故転生なんだ?」

あなたの疑問は最もです。しかし、どちらにも当てはまるあなたをこうするのが一番だとの上からの命令なんです。その世界で善人であれば死んだ後は天国に、逆に悪人であれば地獄に落とされることが確定されます。

通販のお試し期間みたいだな・・・

まあいい、もともと失くした命だ。たとえ別の世界で生き返りつつ同じ事、これもまた運命だ。

「わかった、それに従おう。で?俺はどこの世界に転生するんだ?」

ふふ、それは転生してからのお楽しみです。その方が楽しみがあつていいでしょ。

ではお元氣で。数十年後、もしくは百数年後にまたお会いしましょう。

・・・確かに教えない方が楽しみがあつていいのかも知れんが、今回はそつちの落ち度なんだから教えるのがいいんじやないか?

そう思いながら俺は光に包まれ意識を失つた・・・

TURNOO プロローグ（後書き）

何とかプロローグを投稿しました。久しぶりに新しく投稿するとやはり方を忘れているなあ・・・
まあ以前は2・3週間に1回のペースの投稿だったので少しはスピードが上がると思います。
まあよろしくおねがいします。

TURN01 始まった第2の人生（前書き）

今回から『テュエル』です。

三沢大地が好きな人はどうか注意してください。

TURNO1 始まった第2の人生

天国と地獄の境目で行われた会話から16年、俺は16歳になっていた。

16年。一年で言うと16だが一月では192ヶ月、一日に直すと約5980日。

長いと言えば長く、短いと言えば短い時間だ。いや、実際長かつたんだが。

転生を受け入れた俺がまずしたことは「後悔」だった。どこぞの魔法世界に召喚されたわけでは無いので今まで生きてきた人生をもう一度最初からやり直さなければならなかつたからだ。何故気付かなかつたのだろう、俺も気付かないうちにテンパッていたのかも知れない。

まあ新たに得るものは十二分にあつたので結局は良かつたのだが。とにかくあれから16年、俺は今、高校に向かうため船旅をする。

おつと、忘れるところだつた。俺のこの世界での名前はキルマ、獅子雄キルマだ。

だが何故か前世（といつてもたつた16年前だが）と名前は変わつていない。これには驚いたものだ。

だが、もつと驚いたことがある。それは・・・

「罠カード、破壊輪発動！」

「何！？」

「このカードはフィールド上で表側表示で存在するモンスターを一體破壊し、お互いにその攻撃力分のダメージを受ける！」

建物の中では決闘デュエルが行われていた。しかしあの机の上でカードを広げて行う奴ではない。

ソリッド・ビジョン、つまりはホログラムにより実際にカードの効果が出てくる奴だ。

もう分かるだろ？俺は遊戯王の世界デュエル・モンスターズに転生していたのだ。

この世界で初めてデュエルを見た時そりやぶつたまげたもんだ。なんせ迫力が違うからな。

ちなみに時代的には海老頭の出てくる世界でも無ければヒトデ頭の出てくる世界でもない、融合モンスターが大活躍のGXな世界である。

個人的にはバイクに乗った無口なメ蟹ツクの世界が良かつたんだがまあいい。

ここに行われているのはデュエル・アカデミア入学のための実技試験デュエルだ。

今しがたデュエルに勝利した奴は三沢大地。勝利の方法がアニメと一緒にだな。この流れだと合格だろ？

「すっげー強いなお前！」

「ああ。」

「今年の受験生で2番目くらいに強いかもな」

今三沢に話しかけたやつはこの世界の主人公の遊城十代、右隣にいる奴が後の弟分の丸藤翔だ。

「ん！？」

「試験番号110番、遊城十代くん。」

「お。よーし、俺の番だ！」

「君。」

「ん？」

「何故、僕が2番なんだい？」

「ん？ 一番は俺だからやー。」

「！」

「僕より筆記試験の順位が10番いいだけで、何であんなにあんな自信が持てるんだろ？」「うやましい……」

まあそいつは、お気楽で能天氣、それが十代なんだから。気にするだけ無駄だろ？

最も俺は進んで関わる余裕はないがな。

十代とクロノスとの決闘もアニメ通り。まあ負けてもひりうちやあ困るからこれでいいんだがな。

「どんなもんだ！」

「す」「よ、あのクロノス先生に勝つなんて！」

「おめでとう1番くん。」

「す」「こはしゃあやつだな。まあ分からんでもないが。しかし……

「もう少し静かにできなにのかあいつらは？他の受験生の迷惑だろ

う……」

「あ、悪い。」「めんな、つるやへして……」

「……」

俺がぼやいていると、こきなり十代が謝つてきた。……でかいつとの距離つて結構あつたよな？……

「いや、俺は大丈夫だ。ま、おめでとう。」

「おひ、ありがとうな！俺は遊城十代だ、よろしくー。」

「三沢大地だ、よろしく。」

「僕は丸藤翔つす。よろしく。」

「獅子雄キルマだ、よろしく。」

顔合わせをする気はなかつたんだが、仕方ない。これも運命だ。

「試験番号2番、獅子雄キルマくん。」

「どうやら俺の番だな。」

「「「試験番号2番！？」」「」

そうとう驚いているな。まあ無理もない。俺の世界では単なる遊びでしかなかつたからカードテキストが覚えやすかつたからな。失敗したのはOCGと効果が違うカードだけだ。
もし元の生まれがこの世界だつたら「ひはいかなかつただろうが。

「ま、そうじつ」とだ。また後でな。」

「すつげー、あいつ強いのかな？」

「多分強いと思うよ？・・・どうしたの三沢くん？」

「いや、なんでもない・・・」

「それでは始めよつ、試験番号2番獅子雄キルマくん。」

俺の相手は名もなき試験官・・・じゃなかつた試験官だ。しかしモブキャラでも試験官は試験官、気を引き締めないとな。

「お手柔らかに。」

「「決闘！！」

キルマ L P 4 0 0 0
試験官 L P 4 0 0 0

「先行は君からだ。さあドローしたまえ。」

「では遠慮なく。俺のターン！ドロー！俺は手札から『闇竜の黒騎士』を召喚、カードを一枚伏せてターンエンド！」

闇竜の黒騎士 ATK19000 / DEF1200

このデッキは俺が複数持つデッキの中のお気に入りの一つだ。相当手札が悪くない限り負けることは無い。

「いきなり攻撃力1900のモンスターだと…？私のターン！ドロー！私は手札から『切り込み隊長』を召喚！

切り込み隊長 ATK12000 / DEF400

「そしてモンスター効果発動！このカードの召喚に成功した時、手札からレベル4以下の戦士族モンスターを一体特殊召喚できる！私は『ならず者傭兵部隊』を特殊召喚！」

ならず者傭兵部隊 ATK10000 / DEF1000

「そしてならず者傭兵部隊の効果発動！このモンスターを生贊にすることでフィールド上に存在するモンスターを選択して破壊する」とが『リバースカードオープン！速効魔法『禁じられた聖杯』！このカードはフィールド上に表側表示で存在するモンスターを一体選択し、エンドフェイズ時まで選択したモンスターの攻撃力を400

ポイントアップし、効果を無効化する…」なんだと…?「

禁じられた聖杯の効果により、ならず者傭兵部隊の効果が無効化される。

「くつ、これではならず者傭兵部隊の効果が使えない!…私はカード一枚伏せターンエンド!」

「俺のターン、ドロー!俺は手札から『魔法カード』『強欲な壺』を発動!カードを2枚ドロー!そして手札から『魔法カード』『無の煉獄』を2枚発動!このカードは俺の手札が3枚以上ある場合に発動できる!この効果で俺はカード一枚ずつドローする!そしてこのターンのエンドフェイズに俺は手札を全て捨てなければならない!」

引いたカードは…これならいける!

「さらに手札から魔法カード『天使の施し』を発動!俺はカードを3枚ドローし、手札からカードを2枚墓地に送る!…」

「また手札増強カードだと!…」

俺のデッキには手札を捨てる手札増強カードは結構入っているからな。アンデットとは相性がいい。

しかし、今日のデッキはよく回るな。何故だ?

まあいい。俺が落としたのは『ゾンビ・キャリア』と『馬頭鬼』だ。ここからシンクロ召喚に繋げることが出来る。

ちなみに俺がシンクロ召喚を使えるのは、前の世界で作ったデッキを持っているからだ。

何故持っているかと言うと、あれから偶に俺のもとを訪れる死神がデッキを持ってきたからだ。

この世界で使うのはまずいんじゃないかと思い聞いてみたが、奴が言うには自分たちのせいで俺が転生する羽目になつた『お詫び』ら

しい。

まあそれでもゾンビ・キャリアも入れてこのデッキを使うのは、この世界では初めてだ。

普段から使のは拙いし、なによりシンクロ召喚したら色々と噂になり、デッキを狙われる可能性も出てくるからな。

「更に俺は手札から魔法カード『^{デュアルサモン}二重召喚』を発動！この効果により、俺はこのターン通常召喚を2回行つことができる！俺は『ゾンビ・マスター』を召喚！」

ゾンビ・マスター ATK1800/DEF0

「そしてゾンビ・マスターの効果発動！このカードがフィールド上に存在する限り、1ターンに一度手札のモンスターカードを一枚墓地に送ることで自分、または相手の墓地に存在するアンデット族モンスター一体を特殊召喚する！俺は手札のマーダーサーカス・ゾンビを墓地に送り、墓地のマーダーサーカス・ゾンビを特殊召喚する！蘇れ、マーダーサーカス・ゾンビ！」

マーダーサーカス・ゾンビ ATK1350/DEF0

「そして俺は二重召喚の効果で手札からもう一体のマーダーサーカス・ゾンビを召喚！そして俺は手札のカード1枚をデッキトッピングに戻し、墓地からチューナーモンスター『ゾンビ・キャリア』を特殊召喚する！この効果で特殊召喚したゾンビ・キャリアはフィールドを離れた時、除外される！」

ゾンビ・キャリア ATK400/DEF200

「チューナーモンスターだと！？何だそれは！？」

あいつ、あんな攻撃力の低いモンスターを出してどうするつもりだ？

弱い奴なんじやないか？

こいつを馬鹿にする声が観客ギャラリーから聞こえるが気にする」とは無い。こいつらの強さは俺がよく知っている。それに次の瞬間その口が驚きに開かれるからな。

「こいつを馬鹿にすると痛い目を見るぜ？レベル2のマーダーサーカス・ゾンビ一体に、レベル2のゾンビ・キャラリアをチューニング！」

「チューニング！？何だそれは！？」

2 + 2 + 2 = 6

「冥府を統べし不死の魔王よ。死者の恐怖を生者に示し、現世セイセイを恐怖で戒めろ！シンクロ召喚！

いでよ『アンデット・スカル・デーモン』！」

『オオオオオ！・・・』

アンデット・スカル・デーモン ATK2500/DEF1200

アンデット・スカル・デーモンが召喚される。16年ぶりに見ると爽快だな、改めてシンクロ召喚のすごさが分かるというものだ。だがいつまでも感心しているわけにもいかないな。

「これは『テーモン召喚』！？何故こんなレアカードを！？」

「これは『テーモン』の召喚では無くアンデット・スカル・『テーモン』です。お間違えなく。」

まあ間違えるのも無理はないのかも知れない。見た目は『テーモン』の召喚を恐ろしくしたような姿だからな。

「さらに俺は墓地の馬頭鬼の効果発動！墓地のこのカードを除外することで、墓地からアンデット族モンスターを一体特殊召喚する！蘇れ、マーダーサーカス・ゾンビ！」

俺の場に再度マーダーサーカス・ゾンビが召喚された。これで俺のモンスターは3体、これで決める！

「俺はマーダーサーカス・ゾンビで切り込み隊長に攻撃！」
「残念だがリバースカードオープン！『聖なるバリア ミラーフォース』！このカードは相手モンスターの攻撃宣言時に発動する」とが出来る！

その効果で相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊「アンデット・スカル・『テーモン』の効果発動！このカードが表側表示で自分フィールド上に存在する限り、俺のフィールドのアンデット族モンスターはカードの効果では破壊されない！『不滅の波導』！」
「何だと！？」

アンデット・スカル・『テーモン』から発せられた不滅の波導を受け、ミラー・フォースが音を立てて破壊されていく。やはりあのカードはミラー・フォースだったか。

そしてマーダーサーカス・ゾンビの鎌が切り込み隊長を脳天から真っ二つにする。ソリッド・ビジョンだとすごい光景だな。

試験官 LP4000 3850

「さりにゾンビ・マスターでダイレクトアタック！」

「ああああああああ！」

試験用 LP3850 2050

「これで終わりだ！アンデット・スカル・デーモンでダイレクトアタック！『死降雷』！」

試験官 LP2050 0

死降雷が決まり、会場に観客の声が轟いた。やはり手を抜かず本気でデュエルするのはいいな、心地がいい。今までバレると面倒だからシンク口召喚をしたことが無かつたからな。

まあそれでも負けたことはないか そう考へてしる。と詰謎直か起きた
上がつた。

「試験用のデッキとはいえ、LPを削られる」と無く勝利するとはな。私の完敗だ。おめでとう、試験番号2番。文句なく合格だ。」

試験用と言つても結構なデッキだつたと思つがな。といふが合格を通知されるのは別にかまわないんだが、じいじが言つのはまずいんじやないか？

大体あんたの一存じや決められんだろう? まいにい、とにかくお墨付きを貰つたんだ。文句があるわけでもないしな。

「これからテュエル・アカデミアで頑張つてくれたまえ。」「ありがとうございます。」

俺がフィールドを立ち去つとした時、

「やうだ、思い出した!」

いきなり三沢の大声が聞こえた。 一体何なんだ?

観客 side

「やうだ、思い出した!」

何故こんなことを思い出せなかつたのだろう。俺は唇を噛む。

「なんだよ三沢?」

「何を思い出したの?」

「彼、獅子雄キルマのことだ! 彼は6年前にアメリカで開かれたデュエルの世界大会で優勝したことがあるんだ!」

「ええ!?」

彼はその時とは違つテッキを使つていてから気付かなかつた! あの時は俺もテレビの前で手に汗握つて応援したものだ。

キルマ side

あの馬鹿、よけいなことを！

俺は三沢の発言を聞き苦々しく思つた。これを知られると面倒なんだよ。優勝したのが最年少だつたせいで、あれから暫くテレビ出演の依頼で文字通り寝る暇もなかつたからな。

しかも俺の首を狙つてデュエルを挑む奴や、デッキを狙う奴が増えたからな。デュエルをしに来た奴らはデュエルで返り討ちに、デッキを狙いに来た奴は肉体的にも精神的にも叩き潰して病院送りにしてやつたがな。

病院送りにした連中は全員身体は全治1ヶ月、心はさうして3ヶ月ほど治療が必要だつたが自業自得だな、俺の知つたことじやない。

「おめでとう、キルマー！ すごいな、ノーダメージで勝つちまつんて！」

「ほんと、すごかつたつす！」

「さすがアメリカの世界大会での優勝者」黙れ。」

三沢が再度その話を持つたので俺はこいつの胸ぐらを掴んだ。何が起つたのか分からず啞然とする十代達。胸ぐらを掴まれた三沢も困惑の色を隠せない。

「もう一度その話をしてみる、潰すぞ？」

「お、おい！ いきなりどうしたんだよー？」

「そうつす！ 喧嘩はダメつすよー？」

後ろで十代達が騒いでいるがそんなのはどうでもいい。こいつの口

を塞がなきやならんからな。

「俺はその話を聞くと虫唾が走るんだよ、優勝してからカードやデッキを狙う奴が出てきたからな。

最もそのたびに返り討ちにして病院に叩き込んでやつたがな。

今度そのことを言つてみる、お前も叩き潰して病院送りにしてやる

よ。

ちつ、騒ぎを聞きつけて教師が来やがつた。俺は三沢を離すと試験会場を後にするのだった。

三沢 side

「大丈夫か君！？怪我は無いか！？」

「ゲホッ、だ、大丈夫です。」

先生たちがキルマを止めるためによつてきた。どうやら誰かが呼んだらしい。

「マンマニアー！まつたくなんて生徒ナーネ！これは彼の合格を見合わせる必要ーが「待つてくださいー」何故ナーネ？」

俺は彼の合格処分を取り消す考えを下そうとしたクロノス教諭を止める。

「彼は、キルマは悪くないんです！俺が知らなかつたとはいえ彼が気にしていることを思い出させてしまつたから・・・」

「どういふことナーネ？」

俺は、彼がアメリカでの優勝後に起こったことを話した。

「そうだったノーネ・・・」

「悪いのは俺なんです、どうか彼の合格を取り消さないでください！」

「俺からも頼むぜ先生！」

「僕からもお願ひす、先生！」

俺は必死に頭を下げた。このままでは彼に会わす顔が無い、何より俺はまだ彼に謝罪できていないからだ。

「・・・分かったノーネ。そこまで言つたラ仕方がないノーネ。」

「それじゃあ！・・・」

「彼の合格を取り消すのは辞めるノーネ！」

「「「あ、ありがとうございます！」」」

「シニヨール・キルマもいい友達を持つたノーネ。」

俺たちの訴えが先生に届いた！これで彼の不合格は撤回された！

「やつたぜ！」

「ほんと、よかつたつす！」

「本当にありがとうござります！」

良かつた、本当に良かつた！俺は彼に謝らないとな、しかし彼が許してくれるかどうか・・・それなら許してくれるまで謝るまでだ。俺はそう誓つた。

「ちつ、おかげで思い出しちゃった・・・」

俺は自宅の自分の部屋でイラついていた。別に世のことは今は何とも思っていないが、何故あんなに反応したのだらう。

「俺も年齢通り、まだまだガキつてことか・・・」

まあいい、これで俺に近づいてくる奴が減ることを考えると良しそうか。俺は前の世界でもそうだが、基本的に人と深く関わり事は無い。

前の世界では世間一般で親友と呼べる奴も、あえて2、3人程度しか作らなかつたしな。俺の周りには昔から俺についていれば守ってくれる、俺と仲良くなつていればいざという時に助けてもらえるという俺を利用することしか考えない奴ばかりだったからだ。そういう奴とは絶対に関わらうとしなかつたし、また近づけようともしなかつた。

俺が本当に信用するのは最初からそういう打算を持っていない奴だけだ。最も俺を利用しようとした奴は逆に利用してやつたこともあつたがな。

まあまあ、そんな物騒なことを考えないでください。

「何しに気やがつた?」

いいじやないですか、遊びに来るくらい。

何が遊びに来るくらいだ。ただサボりに来てるだけだらうが。この死神は度々俺の元を訪れる職務怠慢な奴だ、さっさとリストラされちまえ。

見ていましたよ、今日のテコエル。すこかつたですねーってなにするんですかあーーー?

「お前がいらっしゃることを connaîtからだ。」

「ここの口を止めるには塩を撒くに限る。まあ死神に聞くとも思えるが、何故か有効だ。

「うう、口の中がじゅうじゅうします……

自業自得だな。

「そんなことよつ2週間後から見事高校生ですね、おめでとう」
ぞこます。

「あつがとうよ。」

「いらんことを言つたと思えばちやんと約確なことを言つてくる。抜け田のなこといか、気が利くと言つつか……

「えいえいいんですよ……! ? まよい、専務にバレた! ? ジや、じゃあこれで失礼しまーすーーー? 」

やつてあいつは慌てて帰つて行つた。本当に騒がしい奴だ。

「まあいい。もう寝るとあるか。」

いつのまにか夜は更け、すっかり暗くなつていて。俺はまだ見ぬテコエルアカデミアの地を夢見て眠りに就いた。

TURNO1 始まった第2の人生（後書き）

キ「さて、今回の最強カードは……アンデット・スカル・デーモンか。」

アンデット・スカル・デーモン
「ゾンビ・キャリア」 + チューナー以外のアンデット族モンスター
2体以上

自分フィールド上に表側表示で存在するアンデット族モンスターはカードの効果では破壊されない。

キ「アンデット族デッキの切り札その1だ。俺のデッキの主軸の一枚だな。効果名は『不滅の波導』、攻撃名は『死降雷』だ。ちなみにどちらもRオリジナルだ。」

実際に使っているモンスターの一体です。といつてもTFのですが・
・現実ではデッキすら作って無いからなあ。

チューナー以外のアンデット族モンスター2体というのを忘れていて他のアンデット族シンクロモンスターを出さなければならないことが多い不憫なモンスターです。

基本チューナー以外のモンスターはマーダーサーカス・ゾンビだし。この時はまだ発売されていないカードも多く入っています。そこそここれは良く分からないので大目に見てください、いやホントに（泣）

あと基本的にデュエルタクティクスは低いです、小説の中のデュエルも低レベルでしょうがそのところは勘弁してください。
そして強欲な壺と天使の施しですが、この時まだ禁止されていなかつたので使っているだけなのでご了承ください。

作者はこの時代の禁止・制限・準制限がなんなのか良く知らないのでそれも勘弁してください（泣）

感想お待ちしています。

TURN 02 傲慢といつづの暴力（前書き）

今回は当初は嫌味なあの人人が登場です。傲慢つて一種の暴力みたいなものだよなあ・・・

そしていきなりタッグフォースキャラ登場です。さて、誰が出てくるのやら。

そしていきなりオリ設定入っています。お楽しみに。

これから3日後、デュエルアカデミアから合格通知が届いた。結果は合格、しかも何故かオベリスクブルーだ。

・・・オベリスクブルーって中等部のエリートしか入れなかつたよな、何で編入組の俺が入れるんだ？・・・

俺の中學は一応デュエル關係ではあつたが、デュエルアカデミアとはまた違う學校だったので編入という形でここを受験した。どうやら俺がここへ来たせいなのかどうかは分からんが、少々ダメ、原作とは違う方向へ進んで行つてるらしいな。

合格が決まつてから俺の親（この世界のだが）は自分の事みたいにはしゃいでいた。見てるこつちが恥ずかしくなるくらいにな。

あの日から数日後、俺はデュエルアカデミアへ行くための船に上にいたわけだが・・・

周りが俺の事を話しているのが聞こえる。悪いつわさのほうが多いみたいだがな。十中八九、三沢が俺の事を大声で話したために、俺があいつに掴みかかつたせいだろう。

しかも何かあること無いこと噂されてるしな。だが人の噂も75日、2か月半もいれば消えるだろう。

ま、噂のおかげで誰も近づいてこようとは僥倖だがな。

島に付いた俺達新入生は早速それぞの寮に行き、それぞれの寮の制服に着替えた後、入学式を行つた。

どうでもいいがマジで青い制服つて似合わねえな、てか青色つて嫌いなんだが。まあ入学式と言つても鮫島校長のお話つて感じだったがな。

そうそう、やはりこの世界は俺が実際にアニメや漫画で見た世界とは違っていた。

1つ目、オシリスレッドの寮がボロボロだったのがその何倍か大きくなっていた。昭和のアパートみたいだがな。

2つ目、寧ろこれが一番の変更点だろうな。なんとオシリスレッドとラーエローに、女子生徒が存在するのだ。この世界では女子も実力で寮が決まるらしい。

どちらもいい変更点だな、とくに2つ目がいい。アニメとかを見てそこら辺は気に入らなかつたからな。

入学式を終えた俺がブルー寮に戻るうとした時だった。

「待つてくれ！」

「あん？」

誰だ、話しかけてきたのは？そいつが大声で話しかけるもんだから全員こっち向いてるじゃねえか！つたく、面倒事は嫌いなんだがな。適当に無視しようとした俺だが話しかけてきた奴を見て気が変わつた。相手があの三沢だつたからだ。十代達もいるようだな。大方また俺が三沢に掴みかからぬようのことなのだろう。

「待つてくれ、キルマ！」

「何の用だ？」

「この前は本当にすまなかつた、俺のせいだ不快な思いをさせてし

まって……」

「構わん、もう気にしちゃいない。」

「だがしかし、それでは俺の気が……」

「やめる、ううとうしい。本人が良いつて言つてているんだから良いんだよ、いちいち蒸し返すな。あと、すまないと思つてるなり」
で話しかけるな。全員こっち向いてるだろが。」「す、すまない……許してくれるのか?」

「ああ。」

「ありがとう、そして本当にすまない……」

ビーツやら話はそれだけのようだ。いつのまにか歸つてるな。俺もわざと帰つて飯の時間まで寝るとこいつ、そう思つていたのだが・
・

「キルマ、俺とテュエルしようぜー。」

「開口一番、いきなり何言つてんだお前は?」

十代がテュエルを申し込んできたからだ。隣では翔と三沢もいきなり何を言つ出すのかと言つている。

「何で俺がお前とテュエルしなくちゃならないんだよ?」

「だつてお前強いじやん、俺もお前とテュエルしてみてえー。」

・・・こつわい答えになつてねーよ。

「断る。」

「ええ、何でだよー?」

「何故かといふと興が「貴様のようなオシリスレッドの落ちこぼれ何ぞと、誇り高きオベリスクブルーの生徒がテュエルをするわけ無からう!」人の話を聞けよ……」「

この傲慢な口調、レッジの生徒を侮辱する言葉。こいつは間違いな
く……

「誰だお前？」

「お前、万丈目さんを知らないのか？」

「学園最強の決闘者で、未来の決闘キングと名高いお人なんだぞ！」

やはり万丈目か。アニメの展開的にそろそろ出てくるんだろうと思つてたよ。相変わらず初期のこいつは嫌味だな。俺、初期のこいつ何よりも嫌いなんだよな……

といふか学園最強は丸藤亮だらう？

「分かつたならさっさと出て行け！ここはオベリスクブルーの生徒のみが使うことを許された神聖な場所だ！ここはお前らのようないロッピーアウトボーグが入つていい場所では無い！」

「言いたいことはそれだけか？言い終わつたならお前のほうが出て行くんだな。」

十代達、そして万丈目とその取り巻きたちが驚いて振り向く。……しまつた、こいつらみたいにエリートが正しいと盲信してゐる奴らは何よりも嫌いだからつい口を挿んじました。

「お前は確か獅子雄キルマだつたな。何故同じブルー寮の生徒がオシリスレッドの落ちこぼれをかばう？」

「別にかばつてるわけじやねえ。俺はお前みたいにエリートが全て正しいなんて思つてゐる奴は大嫌いなんだよ。特にお前のような二流の輩と同じように思われるののはな。」

「何だと？俺が二流だと！？」

万丈目とその取り巻きたちが激昂してこちらに向かつてくる。

「そうだ、聞こえなかつたのならむつ一度言つてやる。お前らは二流だ。」

「訂正しろ、俺は二流などでは無い！」

「いいや。お前のように同じデコエリストをバカにするような奴は二流で十分だ。最も二流と呼ぶのもおこがましいがな。」

「貴様！・・・」

「辞めなさい、万丈田君！」

「そうよ、坊や。恥を知りなさい。」

俺に掴みかかる万丈田だが、上のほうから聞こえてきた声に動きを止める。・・・そういえば今の声って2つだったよな？片方は明日香だが、もう片方は誰だ？

「天城院君に藤原君じゃないか！何故君達が止める！？」

「いきなり人に掴みかかるとしたら普通は止めると思うけど？」

「ふふつ。私はその坊やの言つ通りよ。今のあなたで二流と呼ばれても仕方ないわ。だって、私も同意見ですもの。」

「何が止めると思うけどだ。最初から見ていて止める気何ぞ無かつたろうが。」

「気付いていたの！？」

「あんな下手な隠れ方でか？そのツインテールの方がまだマシだつたぞ？」

あんな素人探偵みたいな隠れ方で何言つてんだこいつは・・・

「とにかく、話に入る分には構わないが、名乗るぐらいしたりどうだ？」

「あらあら、私としたことがごめんなさいね。私の名前は藤原雪乃。見ての通り、あなたと同じブルー寮の生徒よ。」

「・・・天城院明日香よ。」

「そうか、こいつどこかで聞いたことがあると思つたらあの藤原雪乃か。TFでは随分と苦しめられたものだ。」

「俺は獅子雄キルマだ。で? 何の用だ?」

「あら、つれない人ね。もう歓迎会の時間だからそろそろ帰つたほうがいいんじゃない?」

「何? もうそんな時間か?」

「そう言われて時計を見てみると確かにもうすぐ歓迎会が始まる時間だ。そろそろ帰つたほうがいいな。」

「十代、三沢。お前達も早く帰つたほうがいい。藤原の言つとおり、もうすぐ歓迎会の時間だ。早く帰らないと飯、食いつぱぐれるぞ?」「ん? もうそんな時間なのか? それは大変だな、俺もここで失礼させてもらつよ。」

「飯食えなくなるのか! ? そりやヤバい! 帰るぞ、翔! 」

「あ、待つてよアニキ! 」

「あ、もう翔はあいつをアニキ呼ばわりしてんのか。確か寮に帰つてからだろ?」

「ふん、さつさと帰るんだな落ちこぼれが!」

「俺に言わせりやお前もだけどな。」

「貴様、まだ言うか! 」

「その辺にしなさい、万丈田君。」

「ふふつ、あまり反論すると自分がそつだと断言してくるようなものよ?」

「くっ、失礼する……」

藤原の言葉を聞いた万丈目は、挨拶もそこそこに寮に帰つて行つた。

「まったく、万丈目君にも困つたものね……」

「それに関しては同感だな。ブルーにはなんのばかりなんだろうな。これなら入試で手を抜いておくんだつたぜ……」

俺はため息をつく。そうすれば少なくともブルーに入れられることは無かつただろうからな。

「あら、それは困るわ。」

「あ？ 何でお前が困るんだよ？」

藤原の言葉に純粋に疑問を抱く。

「だつて、あなたと会つ接点が無くなつてしまつじやない。あなたには入学試験のこととか色々聞きたいことがあるのよ。そひ、色々とね……」

そう言つて、妖艶に微笑む藤原。流石、TFで「アカデミアの女王」と呼ばれていただけの事はあるな……

「それはそれは……アカデミアの女王からのお誘いとは光栄だな。

」

いつもなら相手になどしない、特に女は。前にも話したが、前の世界でも様々なものを狙つて特に女が俺に話しかけてきたからな。基本相手にしないんだが……

こいつみたいに純粋にこの「獅子雄キルマ」自身に興味がある奴は、

生きてきた中で片手で足りるほどの人數だけだつたからな。少しこいつに興味が湧いてきた。

「あら、私のほう！」そ光栄だわ。まさかあなたに私の事を知つてもらえているなんて。」

「そりやどうも。・・・とい、こんな所で話をしてる場合ぢやないな。俺達も戻るとしよう。藤原、天城院。」

「私のことは雪乃と呼んで頂戴。」

「そうか？それなら俺もキルマで構わん。」

「・・・私の事も明日香で構わないわ。」

明日香も藤原に乘じて話す。しかし・・・

「お前、何でさつきからずつと黙つてたんだ？」

「・・・あなた達の会話に入れなかつただけよ・・・まつたく雪乃

つたら、あんなことを言つなんて・・・／＼／＼

「あら、女として強い男に惹かれるのは当然の」とよ明日香？

「惹かれるつて・・・／＼／＼

どつやら色恋には耐性がなこよつだな。見てておもしろい。

「出るんじやなかつたな・・・」

俺はブルー寮のテラスでため息をついていた。原因は今しがた行われているブルーの歓迎会だ。

確かに飯は豪華で美味しいんだが、周りの奴らが酷過ぎる。なんせ全員自慢話しかしないからだ。しかもいつも通り、俺に取り入ろうとする奴らが山のように来やがる。

それなのにこいつらは、上つ面はお上品ときた。俺でなくとも嫌になろう。いや、十代は豪華な飯の時点ではびしきだな・・・

「部屋に戻るとするか・・・」

「そつ置いて部屋に戻るとする俺だつたが・・・

「ちよつといいかしら?」

雪乃がテラスに現れた。どうやら俺に用があるらしいな。

「部屋に帰るところだつたがまあいい。で、何の用だ?」

「あら、忘れたの? デュエルフィールドでの件よ。」

そつこいえばあの後、寮に戻る途中で雪乃にシンクロ召喚に教えるようになつたんだつたな。時間がなかつたから後で話すと約束して。

「そついえばそつだつたな、スマン。何が聞きたいんだ?」

俺は雪乃にせがまれシンクロ召喚について教えてやつていた時、一通のメールが入つた。

『やあ、獅子雄。午前零時にデュエルスペースで待つて。互いのベストカードを賭けたアンティルールで勝負だ。俺が二流で無いということを証明してやる。勇気があるんなら来るんだな。b y万

丈田』

・・・馴れ馴れしい奴だな。てかどこで俺のメールアドを知つたんだ? といふかだんだん原作に乗つて行動しているな、原作に介入する

のは「ごめんなんだが・・・まあそれも運命だ。そう考えていると雪乃が覗き込んできた。

「人のメールを見るのはマナー違反じゃないのか？」

「ふふ、ごめんなさいね。それに関しては謝るわ。万丈目坊やつたら・・・あなたは行くの？」

「まさか、行く気はない・・・と言いたいところだが、天狗の鼻を叩き折る意味でも応じてやるとするよ。」

「ふふ、あなたらしいわね。私も付いて行つていいかしら？」

「別に来たいのなら止めはしないが、バレると下手すりや退学だぞ？」

「その言葉、私こそあなたに返すわ。」

「俺はいいんだよ、俺に来たメールだからな。流石にお前が巻き込まれて退学なんざ後味が悪すぎる。」

「あら、心配してくれるの？ありがとう。」

そんなこんなで雪乃が付いてくることになった。途中で明日香も来ることになつたが問題無いだろう。いや、実際には問題大有りなんだがな。

「よく逃げなかつたな、ドロップアウトボーイ。そして獅子雄キルマ。」

デュエルフィールドには万丈目が仁王立ちしていた。というかこいつ、十代も呼んだつてことは一人同時に相手するつてことか？

「そんなわけなかろう、獅子雄キルマ、まずはお前からだ！」

心中の中を呼んだのか、こいつは？まあいい、そんなことよつ・・・

「十代を呼んで良かつたのか？」このままじゃお前のデッキの構成を知られるぞ？」

「構わん。ドロップアウトボーリに対する俺からのハンデだ。デッキを知られたらぐらいで負ける俺ではない！」

・・・どんだけ舐めきつてるんだこいつは。クロノスとのトヨエルを見ていたんじゃないのか？

「さて、アンティに出すカードだが・・・お前はシンクロモンスター・・・アンデッド・スカル・デーモンを賭ける。」

普通にうつのはカードを自分で決めるものだらう、なんであいつは決めてるんだ？まあいい・・・

「俺が負けたら俺のデッキのカードを選べ。お前の氣に行つたものをくれてやる。」

いちいち上から目線だな、こいつ・・・まあいい。というかカードなんぞいらん。この時代のカードなど全部持つてるからな。

「そんなものはいらん、その代わり俺が勝つたら一つだけ約束しろ。」

「なんだ、言つてみる。」

「一度とオシリスレッドを侮辱するな。もちろんラーメンロードだ。同じデュエリストとしてお前の行動は見てるだけで吐き氣がする。」

「ふん、良いだろ。お前が勝つたらその条件飲んでやる。一度とレッドやイエローをバカにしないと誓おう。（くだらん、誓うわけ無いだろ。それに俺はシンクロモンスターを封じるカードを持っている。それがある限り俺が負けることは無いからな。）貴様が無様に負けるところを天城院君や藤原君、ドロップアウトボーイに見てもらうんだな！」

「頑張れー、キルマ！」

「そうシス、頑張るシス！」

「負けちやだめよ坊や！」

そういえば十代達、これでやっと台詞貰えたな・・・

キルマ LP 4 000

万丈目 LP 4 000

「「デュエル！！」」

「先攻はどうちが」「先攻は俺だ！俺のターン、ドロー！」「人の話を聞けよ。」

まあいい。じつはシンクロ召喚を使つんだ。ハンデだと思えばいい。

「俺は手札からクリッターを守備表示で召喚ー！」

クリッター ATK 1000 / DEF 600

「そしてターンENDだ！」

クリッターだと？というか伏せないのか？アニメと同じ展開みたいだから出してくれるのは地獄剣士だと思ったんだがな。どうやら完全

に一緒にでわけでもないらしい。

まあいい、アニメ通りだと面白みがないからな。少しは楽しめそうだ。

「俺のターン！ドロー！俺は手札から『魔法カード』『ブラック・コア』を発動！自分の手札を1枚捨てることで、フィールド上の表側表示のモンスター一体をゲームから除外する！」

黒い球状のコアがクリッターを次元の狭間に送りこむ。

「ちいっ！これではクリッターの効果が使えん！」

どうやら俺が予想外の手を打つてきたもんだから動搖してゐるな。

「俺は手札から『プロリンクゾンビ』を召喚！」

『プロリンクゾンビ』 ATK1100 / DEF1050

「『プロリンクゾンビ』でダイレクトアタック！」

「ぐおおおっ！」

万丈目 LP 4000 2900

「『プロリンクゾンビ』の効果発動！このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、相手はデッキの上からカードを1枚墓地へ送る！」

「何だと…？くつ…」

落ちたのは奈落の落とし穴か。アンデットは除外に弱いからな、運がいい。

「俺はカードを一枚伏せターンエンド！」

「へいからどう挽回するつもりかな？」

「くっ、俺のターン！ドロー！俺は手札から『強欲な壺』を発動！カードを2枚ドローする！ふつ、俺の勝ちは決まったも同然だな！」

何？何を引いたんだあいつは？

「俺は手札からデーモン・ソルジャーを召喚！」

デーモン・ソルジャー ATK1900 / DEF1500

・・・何かと思えばバーラモンスターじゃねえか。攻撃力は勝つているがそれだけだろ？

「こいつはただの生贊にすぎん！俺は手札から魔法カード『一重召喚』を発動！この効果で俺はこのターンもつ一度通常召喚を行うことが出来る！」

なるほど、手札にあるのは上級モンスターか。さて、何を出す気だ。まあ伏せてある奈落の落とし穴で・・・

「さりに手札から速効魔法『サイクロン』を発動！貴様の右のカードを破壊だ！」

ちっ、奈落の落とし穴が！まあいい、あいつが何を召喚してくるかな。

「さりに俺は手札から魔法カード『クロス・ソウル』を発動！これ

は相手フィールド上のモンスター一体を選択して発動する…このカードを発動したターン、自分のモンスターを生贊にする場合、自分のモンスター一体の代わりに相手のモンスターを生贊にしなければならない。」

なかなか考えたじやないか、確かにこれなら俺のフィールドはがら空きになる。まあクロス・ソウルの効果でこのターン攻撃されることは無いがな。

「まだだ！俺はお前の場のゴブリンゾンビと、俺の場のデーモン・ソルジャーを生贊に捧げ、虚無の統括者を召喚する…」「何だと…」

虚無の統括者 ATK25000 / DEF1600

「その顔から察するところの効果を知っているらしいな…そうだ、虚無の統括者が表側表示で存在する限り相手はモンスターを特殊召喚することが出来ない！」これでシンクロ召喚は封じたぞ！」

まずはいな。確かにシンクロ召喚は特殊召喚、虚無の統括者がいたんじゃそれが出来ん。流石、ブルー寮のトップクラスのデュエリストだ。一度見ただけでシンクロ召喚の弱点を見抜きやがった！

「だがこの瞬間ゴブリンゾンビの効果発動！」このカードがフィールド上から墓地に送られた時、自分のデッキから守備力1200以下のアンデッド族モンスター1体を手札に加える！俺はもう1体のゴブリンゾンビを手札に加える！」

「ふん、そんなその場しのぎのカードで何が出来る…虚無の統括者の攻撃力は2500、足元にも及ばん！カードを一枚伏せターンエ

ンドだ！」

確かにあいつの言ひとおりだ、こいつは単なる気休めにしかすぎん。

「貴様の負けは決まつたも同然だ！ いまならサレンダーをすれば力一では取らないでやる、とあどづするー！」

だがこの「デッキにはまだ逆転できるカードが残つてゐる。だがそれにはあのカードを引かなければー···」

「何やつてんだキルマ！ お前が「デッキを信じなくてどうすんだよー！」

十代！ ··· つたくあいつの言ひとおりだな、俺がここいらを信じなくてどうする。引いてやる！ じやねえか、あのカードをよー···

「俺のターンードローー！」

来たー！ あとはこいつが上手く決まればー···

「俺は手札から魔法カード『天よりの宝札』を発動！」

「天よりの宝札だと！ 貴様、そんな超レアカードを持っていたのかー！」

こいつは昔、大会で優勝した時に手に入れたカード。OCGでは使えないカードだったが、効果がアニメ版だから超レアカードになつてゐる。

「その効果で互いのプレイヤーは手札が6枚になるようドローするー！」

「ちいっー。

これでいいからが来たら・・・よし!

「俺は手札からゴブリンゾンビを召喚!さらに手札から魔法カード『二重召喚』を発動!効果は言わなくても分かるよな?そして俺はゴブリンゾンビをリリース!し、真紅眼の不死竜をアドバンス召喚!」

真紅眼の不死竜 ATK2400/DEF2000

「レッドアイズだと!?それにアドバンス召喚!?

「違うな、こいつはレッドアイズの亞種とも言つべきカード、レッドアイズ・アンデットドライゴンだ。もちろん、アンデット族だ。そしてアドバンス召喚とは早い話が生贊召喚だ。」

「そして俺は手札からフィールド魔法『アンデット・ワールド』を発動!」

俺がアンデット・ワールドをセットした瞬間、周りが機械の空間から何とも恐ろしい墓場のようなフィールドに変わる。

「な、なんだこれは!?

「アンデット・ワールドがフィールドに存在する限り、互いのフィールドと墓地のモンスターはアンデット族となる!」

「何だと!?だがそれがどうした!たかが攻撃力2400の真紅眼では虚無の統括者を倒すことは出来ん!」

「誰がこれで終わると言った?俺は手札から速効魔法『突進』を発動!フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動することが出来る!そして選択したモンスターの攻撃力はエンドフェイズまで700ポイントアップする!」

真紅眼の不死竜 ATK2400 3100

「攻撃力3100だと！」

「虚無の統括者を上回つたわ！」

「これで真紅眼の勝ちだ！」

「そういやいたな雪乃達。すっかり忘れてたぜ。」

「バトルだ！ 真紅眼の不死竜で虚無の統括者を攻撃！』『コルブションフレア』！」

「その攻撃は通らん！リバースカードオープン！罠発動『炸裂装甲』！このカードは相手モンスターの攻撃宣言時に発動することが出来る！攻撃宣言を行つたモンスターを破壊する！」

「残念だがそれは無理な相談だ！リバースカードオープン！速効魔法『我が身を盾に』！このカードは1500ポイントのライフを払うことでの発動することが出来る！相手が発動した『フィールド上のモンスターを破壊する効果』を持つカードの発動を無効にし破壊する！『いけ、レッドアイズ！』

「何！？ 炸裂装甲が！？」

キルマ LP4000 2500

炸裂装甲がレッドアイズから我が身を盾にへと対象を変更される。

「ぐああっ！」

「（だがたかが600、次のターンに手札の死者蘇生を使えば！）

万丈目 LP2900 2300

「真紅眼の不死竜の効果発動！」このカードが戦闘によつてアンティット族モンスターを破壊し、墓地へ送つた時、そのモンスターを自分フィールド上に特殊召喚することが出来る！『服従する死者』…。何だと…？」「

これで俺の場に虚無の統括者が特殊召喚された。フィールドにあいつを守るカードは何もない。

「虚無の統括者で攻撃！これで止め！ガードマンが来る！アンティットルールは校則で禁止されている、時間外に施設を使つてはいるし、校則違反で退学かもよ！」ここで来るのか！？

なんでこれで勝ちつて所で来るんだよ…つたくしゃあねえ！

「雪乃、明日香、十代、翔！ずらかるぞ！」

「ま、待て！貴様から情けはうけん！俺を倒してからいけ！」

「知るか！流石にとつ捕まるのはまずいんだよ！」

万丈目が実に男らしく叫ぶがそんなこと俺の知つたことじゃない。4人ともに逃げ出そうとする。だが…

「何やつてんだ雪乃、さつさと来い！」

「ま、待つて！あなたのデュエルでアンデット・ワールドを見てから腰が抜けちやつて…・・・」

何い！？何やつてんだあいつは…？ええい世話の焼ける！

「きや…ちよ、何を…・・・」

「つるせえ黙つてろ！舌噛むぞ…」

俺は雪乃を背負い、そのまま走りだした。

デュエルアカデミア前

「つたぐ、一時は、どうなる事かと、思つた、ぜ・・・」

軽いとはいえ、流石に人一人を背負つて走るのは少し無謀だつたようだ。動けねえ、そして情けねえ・・・

「・・・なさい。」

「あん? 何だつて?」

雪乃が何か言つたが、声が小さく聞き取れない。

「「」めんなさいね、私のせいだ。あなたに迷惑を掛けてしまつて・・・」

何かと思えばその事か。確かに疲れはしたが別に気にしちゃいないんだがな。

「別にかまわん。誰にだつて怖いものへりこあるだろ?、別におかしいことじやない。」

「でも・・・」

つたく、いつもは無駄に女王なのに何でこんな時だけ大人しくなるのかね」いっは。

「はあ、この話はもう終わりだ。早く帰らないとまた見つかっちゃう。それだけは避けないとな。」

「あーあ、俺も万丈目とデュエルしたかったぜ・・・」

つたく氣楽な奴だ。二つちだつて天よりの宝札が来なかつたらヤバかつたんだぞ？

「勝手にいつてろ。俺たちはこっちだからまたな。」

「おう、じゃあな！」

「キルマ君も明日香さんも雪乃さんもお休みっす！」

「ああ、お休み。」

そういうて十代達は帰つて行つた。

「さて、俺達も帰るか。歩けるか雪乃？」

「ええ、もう大丈夫よ。」

「そうか、じゃあ行くぞ。」

俺たちはブルー寮までいつて、そこからそれぞれ男子棟と女子棟に別れた。

「じゃあな、お休み。」

「お休みなさい。」

「お休みなさい、キルマ。」

ん？今、俺の事呼ばなかつたか？

「どうした、俺は坊やからランクアップしたのかな？」

「ええ、私を背負つて走るキルマ、とても凛々しかつたわ。だからこれは私からの『ご褒美』。」

「そいつはどうも。それじゃ あな。」

どうやら本当に俺は坊やからランクアップしたらしい。いまさらだが、人生何が起こるかわからんな。

そう思い、俺は男子棟へ帰つて行つた。

女子 side

「珍しいわね、雪乃が坊や呼ばわりをしないなんて。」

実際は珍しいなんてものじゃない。私が知る限りでもほんの一握りの人間しかいないのだから。

「ふふつ、私はもうあの人心奪われてしまつたわ。元々最初からあの人興味はあつたけれど、まさかこんなことになるとわね。」

そういう雪乃はなんだかとても楽しそうで、とても美しかつたわ。同じ女である私も思わず見とれてしまつくらいに。

「あら、どうしたの明日香？顔が真つ赤よ？」

「な、何言つてゐの、そんなわけないじゃない！」

全く、本当に何を言つてゐるのかしら・・・でも・・・

「頑張ってね雪乃。私もできるだけ応援させてもらひうわ。」

「あら、それは心強いわね。」

私達はそう言って笑いながら女子棟へ帰つて行くのだった。

TURN 02 傲慢といつも暴力（後書き）

キ「さて、今回の最強カードは・・・天よりの宝札だな。」

天よりの宝札 通常魔法

このカードはメインフェイズの初めにしか使用できない。互いのプレーヤーは手札が6枚になるようにカードを引く。

キ「効果はアニメ版だ。OCG効果だと流石に使いづらすぎるからな。だが相手にもアドバンテージを与えてしまうリスク高いカードでもある。」

実際にTFでも加えられればいいのに・・・これを何度思った事か。基本ドロー運がない作者にとっては喉から手が出るほどほしい完全アニメオリジナル効果を持つカードです。

とにかく遊戯王はデュエルを考えるのが大変ですがなんとか頑張つていいくつもりなので応援よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4677y/>

遊戯王 狂わされし運命

2011年11月17日19時41分発行